

2003年2月10日（月） 早朝晴れ のち曇り 午後から小雨

美術学部での最初の日。

朝10時10分に美術学部の建物に到着する。金曜日の夜にマンチェスターの空港に迎えに来てもらったときが初対面だから、マキシーンさんに会うのは今日が2回目だ。入り口横の事務所で笑顔で迎えてくれる。空港からチェスター・カレッジへのドライブ中にマキシーンさんから聞いていたように、美術学部の中に絵画（Painting）、彫刻（Sculpture）、版画（Printing）、テキスタイル（Textile）の4つの専攻がある。2階建ての棟の中を案内してもらい、2階の絵画の実習室の中を歩いて、これから私が使わせてもらうスタジオを見せてもらった。今までに、私一人だけでこんなに広い空間を作品の制作に使ったことはなかった。マキシーンさんに感謝する。

さっそくスタジオで、私の作品ファイルを見せながらマキシーンさんと話し込んだ。私たち2人の類似点と相違点を挙げていきましよう、とマキシーンさんが提案したので、わたしが作品について語るなかから2人で類似点を拾い上げ、コラボレーションのキーワードになりそうな言葉を書き出した。（[]内の言葉はわたしのつけた注釈）

- ★Pockets、Bags
- ★Kimono [四角。立体を包む平面的な形]
- ★Cage [Protect保護&Restrict制限]
- ★Anonymous [匿名の]
- ★Repetitive [反復的な→ (Just like) Meditation]
- ★Surface [表面のテクスチャー]

この話し合いの中で、わたしたちにはけっこうたくさん類似点があることを発見できた。

12時30分から1階のミーティングに使う部屋で、わたしをこのスタッフに紹介するためのサンドイッチパーティーが開かれた。このことは金曜日にマキシーンさんから聞いていたので、もしかしてスピーチをすることになるかもしれない・・・と、スピーチ原稿を英語で考えていた。でも実際そんなに

堅苦しい席ではなかったのでスピーチするような感じではなかったけれど、原稿を一度書いたので話すことが頭に
入っていてよかった。このときに集まったのは10
人ほど。初対面の方もいれば、午前中にすでに会った方もいる。みんな銘々に好きなものを取って食べている間に、マキシーンさんが全員にむかって私の紹介をし、スタッフ一人一人に引き合わせてくれた。

午後からは、テキスタイルの実習室でマキシーンさんの作品とその背景についてうかがった。最初に見せてもらったのが、リサーチのファイルだった。

A3の紙をそのまま入れられる大きいファイルに、たくさんのコピーが入っている。ここチェスターカレッジで働きだしてから、二人がかりで集めたそうだ。図書館や博物館でコピーした資料が美しい秩序をもってファイルされている。たとえば、日本の刺し子の野良着や韓国の伝統的な衣類などの平面的で彼女が好む服飾、表面のテクスチャーが彼女の好む風合いを持った絵画、ミニマリズムの作家の作品、繊維素材を作品に使っている作家の作品などなど。

そういえば、マキシーンさんが使っている空間はどこも（車の中は除くが、）白を基調に黒か灰色かベージュの物が少し、まっすぐにお行儀良く並べられている。この実習室は手前がマキシーンさんが使っている空間で、奥の方はテキスタイルを専攻している学生たちの制作スペースになっている。入り口のドアには、

HAVE YOU CLEARED UP
BEFORE YOU LEAVE THE STUDIO
PLEASE MAKE SURE YOU HAVE
LEFT YOUR WORK AREA TIDY. ANY
BORROWED TOOLS SHOULD BE
RETURNED TO THE STORE.

きれいにしましたか

このスタジオから出る前に、あなたが使った場所が
きちんと整頓されていることを確認してください。

借りた道具は必ず保管場所に返さなければなりません。

と書いてある紙が、プラスチックパウチされたのが貼られている。
マキシーンさんの研究室も非常に整然としている。きれいに使って

まずね、と言うと、部屋のなかのすべてを支配下におかないと気が済まないんですよ、との返事が返ってきた。

マキシーンさんの作品はどれも、白や生成りが基盤になっていて、それに染めていないナチュラルな色が加わっている。形も直線をつかった四角形が基調になっているので、禁欲的な印象を受ける。とってもしニマルなのだけど、表面のテクスチャーは思わず触ってみたくなるような親しみを感じる。

実習室の内部も、特にマキシーンさんの使っているエリアは彼女の作品と同じ印象を持っている。

聞くと、住んでいるお宅の部屋は、もっとミニマルなんだそうである。ゴミ箱すらストックのための部屋に置いてあるそうで、非常に徹底している。いろいろな物があふれて雑然としているわたしの部屋とは、たぶん正反対なのだろう。今回わたしに与えられたスタジオはきちんと整頓した状態で使おうと決心した。

彼女の現在進行している作品についてもうかがった。英語でこの文章を読んでいる方はすでにウェブサイトでいろいろな情報を得ていると思うのだけれど、日本語で読んでいる方の為に、簡単にマキシーンさんのプロフィールを紹介しようとおもう。

英国で年間を通じてもっとも活躍したテキスタイルアーティストに送られる賞である

Jerwood Applied Art

Prize2002 Textilesを受賞したばかりのマキシーン・ブリストウさんは、現在はチェスター・カレッジのなかの美術学部でテキスタイルを教えておられる助教授でもあるけれど、同時に作品を制作して発表しているアーティストでもある。大学ではテキスタイルの中の刺繍のジャンルを学んで、修士課程も修められた。マキシーンさんの最新作は、彼女のこれまでの作品とくらべてもより一層ミニマルさ（禁欲的な感じとも言えるかもしれない）が増している。このウェブサイトでも彼女の代表作として出てくる画像の、手すりみたいな形をしているのがその作品なのだが、これは全てクロスステッチのような刺繍（こちらではニードル・ポイントと呼んでいるようだ）で埋め尽くされている。死角になってる壁側の面も、もちろんきちんと埋められている。いつも常に身近にあって、気にも留めなくなったものの存在の重さを、一針一針の手作業に置き換えて表現しているのである。

それにしても、大学の仕事は大変忙しい（ほんとにむちゃくちゃ忙しいことを、後になるにつけ実感している次第・・・）のに、どうしてこんなに時間がかかる作品をつくらせてしまうのだろうか。大学の仕事があるときは、やはり作品制作の作業自体は進まないのだそう。授業がある時期は、授業の準備や学生との文章のやりとり、その他の雑事の為の時間をとるので、長い休みに作品制作の作業にすぐ取りかかれるように、リサーチしたり、ドローイングや文章をかきながら、自作のコンセプトをずっと練っているそう。気の遠くなるような最新作は、本人が制作しただけでは予定の面積が埋まらないので、他の人にも作品への参加を呼びかけ、必要な説明と材料一式の入ったキットを地域の刺繍ギルドに持ち込んだ。このキット自体も作品として展示されている。

忙しいからといって制作する内容を変えるのではなく、時間を内包しているような、手数のかかる地道な仕事で作品を制作しているマキシーンさんに、はじめてのミーティングで大切なことに気付くための鍵を手渡してもらった気がした。

英語については、聞き取って理解しようとするだけで手いっぱい、自分の作品や自己紹介もする機会が多かったのに、なかなか思うように話せなかった。言葉だけでなく、環境に慣れることに今はまだ必死なのだった。

新田 恭子